

# 明治の文学の開拓者

——坪内逍遙——

内田魯庵

青空文庫



坪内君の功労は誰でも知ってる。何も特にいわんでも解ってる。明治の文学の最も偉大なる開拓者だといえどそれで済む。福地桜痴うち すえまつけんちよう、末松謙澄などという人も創業時代の開拓者であるが、これらは鋏を入れてホジクリ返したただけで、真に力作して人跡未踏の処女地を立派な沃野長田たらしめたのは坪内君である。

有体ありていにいうと、坪内君の最初の作『書生氣質』は傑作でも何でもない。愚作であると公言しても坪内君は決して腹を立てまい。私が今いうと生意氣らしいが、私は児供こどもの時からヘタヤタラに小説を読んでいた。西洋の小説もその頃リットンリットンの『ユーゼニ・アラム』を判分教師に教わり教わりながらであるが読んでいた。

(これが私の西洋の小説を読んだ初めで。)であるから貸本屋の常得意の隠居さんや髪結床かみゆいどこの職人や世間普通の小説読者よりは広く読んでいたし、幾分かは眼も肥えていた。であるから坪内君の『書生気質』を読んでも一向いつこう驚かず、平たくいうと、文学士なんてものは小説を書かせたら駄目なものだと思っていた。格別気にも留めずにいた。その時分私の親類の或るものが『書生気質』を揃えて買って置きたいからって私に買ってくれといった時、私にはあんなツマラヌものはおよしなさい、アレよりは円朝の『牡丹燈籠』の方が面白いからといって代りに『牡丹燈籠』を買ってやった事がある。『牡丹燈籠』は『書生気質』の終結した時より較ややおくれて南伝馬町の稗史出版社(今の吉川弘文館の横町)から

若林珣藏氏の速記したのを出版したので、講談速記物の一番初めのものである。私は真実の口話の速記を文章としても面白いと思つて『牡丹燈籠』を愛読していた。『書生氣質』や『妹と背鏡』は明治かぶれのした下手な春しゅんすい水ぐらいにしか思わなかつた。

私のような何にも知らないものさえ実はこの位にしか思わなかつたのだから、その当時既にトルストイをもガンチャロフをもドストエフスキーをも読んでいた故長谷川二葉亭が下らぬものだと思つたのは無理もない、小説に関する真実の先覚者は坪内君よりは二葉亭であるといつても坪内君は決して異論なからうと信ずる。私は公平無偏見なる坪内君であるが故に少しも憚からずに直言する。

けれども『書生氣質』や『妹と背鏡』に堂々と署名した「文学士春の屋おぼろ」の名がドレほど世の中に対して威力があつたか知れぬ。当時の文学士は今の文学博士よりは十層倍の権威があつたものだ。その重々しい文学士が下等新聞記者の片手間仕事になつていた小説——その時分は全く戯作だつた——その戯作を堂々と署名して打つて出たという事は実に青天の霹靂といおう乎、空うごく谷うごくのきょうおん磴きょうおん音きょうおんといおう乎、著るしく世間を驚かしたものだ。

自分の事を言うのは笑止おかしいが、私は児供おこの時から余りアンビションアンビションというものがなかつた。この点からいうとよほど馬鹿ばかだつた。それ故大学を卒業して学士になろうなどという考は微塵みじんもなく、学士というものがどれほどエライものであるか何かそんな事

は一向念頭になかった。であるから『書生氣質』や『妹と背鏡』を見て、文学士などというものは小説が下手なものだと思つたばかりであるが、親だとか伯父だとかが私が小説に耽溺するのを頻りに喧ましくいつて「下らぬ戯作などを読む馬鹿があるか」と叱られるたんびには坪内君を引合ひきあひに出しては「文学士でさえ小説を書く、戯作戯作と軽蔑するようなものではない」というと、親や伯父は文学士をエライものだと思つてゐるから聊かいささかへコタレの氣味であつた。

こんなわけで「文学士春の屋おぼろ」というものは非常な権威があつた。かつ坪内君は同時に小説論をしばしば書いた。後の『小説神髓』はこれを秩序的に纏めたものだが、この評論は確か

に『書生氣質』などよりは重かった。世間を敬服さした。これも私は丁度同時にバージーンバージーンの修辞学を或る外国人から授かつて、始終講義を聞いていた故、確かにその一部をバージーンから得たらしき（坪内君には聞いて見ないが、）『小説神髓』を余りに驚かなかつたが、シカシ例証として日本の作物を挙げて論じられた処は面白くも読みかつまたお庇かげで蒙ひらを啓いた処もある。二葉亭はこの『小説神髓』に不審紙を貼りつけて坪内君に面会し、盛んに論難してベリンスキーを揮ふりまわ廻したものだ、私は日本の小説こそ京伝の洒落本しやれぼんや黄表紙、八文字屋ものの二ツ三ツぐらい読んでいたけれど、西洋のものは当時の繙ほん訳書やくしよ以外には今いたりツトンの『ユーゼニ・アラム』だけしか知らず、小説論如きは皆

目解らなかつたから、『書生氣質』こそ下らぬものだと思つて  
いたが『小説神髓』には大分お庇を蒙むつた。

その後私は一年ばかり専門学校に籍を置いた事がある。坪内君、  
大阪朝日の土屋君、ドイツ独逸のドクトルになつて渡辺龍聖君などと  
同時代だつた。もつとよんどこ尤も抛らない理由で籍を置いたので、専門学校の  
科程を履修しようというツモリは初めからなかつたのだから、籍  
を置いたというだけで、ほと殆んど出席しなかつたが、坪内君の講義  
はその時分評判であつたゆえ数回聞いた事がある。であるから坪  
内君は私の先生ではあるが、多勢の聴講者の中に交つてたツた二、  
三回しか講義を聞いただけのすこぶ頗る薄い関係であるし、平生先生呼  
ばわりをされる事が嫌いな人だから一度も先生といった事はない

けれども、たしかに明治二十二年頃の初対面以後今日まで始終往来して少からずお世話になつてゐる。実に親切な人だ。親身になつて世話をしてくれる。私はお世話になつたが、お世話を甘受しなかつた事もあるから、事に由ると世話甲斐のない男だと思われてゐるかも知れぬがシカシ心中では常にお世話になつた事を感謝しておる。故二葉亭に關する坪内君の厚情は實に言舌を以て尽しがたいほどで、私如きは二葉亭とは最も親密に交際して精神上には非常に誘掖されてゐるにも關わらず、二葉亭に対していまだかつて何も酬<sup>むく</sup>うておらぬ。坪内君に対して實に恥入る。かつまた二葉亭に対して彼ほど厚情を寄せられるのを深く感謝しておる。

話は見当違いに飛んで終つたが、坪内君の世間に及ぼした勢力

は非常なもので、いやしくも文芸に興味を持った当時の青年は、「文学士春の屋おぼろ」の名に奮起して身を文壇に投ずる志を立てた。例えば二葉亭の如き当時の造詣はむしろ坪内君を凌ぐに足るほどであつたが、ツマリ「文学士春の屋おぼろ」のために崛起したので、坪内君莫なかつせばあるいは小説を書く気には一生ならなかつたかも知れぬ。また『浮雲』の如き世論『書生氣質』以上であるが、坪内君の合著の名でなかつたなら出版する事は出来なかつたのだ、出版しても恐らくアレほどに評判されなかつたろう。

尾崎、山田、石橋の三氏が中心となつて組織した硯友社けんゆうしゃも無論「文学士春の屋おぼろ」の名声に動かされて勃興したので、坪内君がなかつたならただの新聞の投書ぐらいで満足しておつたら

う。紅葉の如きは二人とない大才子であるが、坪内君その前に出でて名を成したがために文学上のアンビションを焰もやしたのでさもなくばやはり世間並の職業に従事してシヤレに戯文を書く位で終つたろう。従来片商売として扱われ、作者自身さえ戯作として卑下していた小説戯曲などが文明に貢献する大なる精神的事業である事を社会に認めしめたのは全く坪内君の功勞である。

坪内君はイツでも新しい道を開く。劇の如きも今日でこそ猫も杓子も書く、生れて以来まだ一度も芝居の立見さえした事のない連中が一と幕物を書いてる。児供のカタゴトじみた文句を聯ならべて辻つじ棲つま合あわぬものをさえ気分劇などと称して新らしがっている事の出来る誠に結構な時勢である。が、坪内君が『桐一葉』を書

いた時は団十郎が羅馬法王ローマで、桜痴居士おうちが大宰相で、黙阿弥もくあみ劇が憲法となつてゐる大專制国であつた。この間に立つて論難批評したり新脚本を書いたりするはルーテルが法王の御教書を焼くと同一の勇気を要する。『桐一葉』は勿論もちろん『書生氣質』のようなものではない。中々面白い。花見の夢の場、奴の槍踊の処は坪内君でなくてアレほど面白く書くものは外にあるまい。が、今日坪内君はこれを傑作とも思うまいし、また坪内君の劇における功労は何百年来封鎖して余人の近づくを許さなかつたランド・オブ・シバイの関門を開いたのであつて『桐一葉』の価値を論ずるが如きはそもそも末である。

早稲田における坪内君の功蹟は、左も右とくも文壇かに早稲田派な

るものがあつて、相応に文学に貢献もすれば勢力も持つてゐる一事が明白に証明してゐる。これ以上一語を加うる必要がない。早稲田大学は本<sup>もとも</sup>と高田、天野、坪内のトライアンビレート<sup>もとも</sup>を以て成立した。三君各々<sup>おのおの</sup>相譲らざる功勞がある。シカシ世間が早稲田を認めるのは、政治科及び法律科が沢山の新聞記者や代議士や実業家を輩出したにも関らず、政治科でも法律科でもなくて文学科である。何といつても日本の最高学府たる帝国大学に対しては民間私学は顔色なき中に優に大学と拮抗して覇を立つるに足るは実業における三田と文学における早稲田とで、この早稲田の文学をしてシカク威力あらしめたるは一に坪内君の功勞である。文部大臣が三君の中先ず第一に坪内君を擢<sup>ぬき</sup>んで報ゆるに博士の学位を以て

したのは推薦者たる大学もまた坪内君の功勞を認めざるを得なかつたのであろう。下らぬ比較をするようだが、この三君を維新の三傑に比べたなら高田君は大久保甲東で、天野君は木戸である。大西郷の役廻りはドウシテモ坪内君に向けなければならぬ。坪内君がいなかったら早稲田は決して今日の隆盛を見なかつたであらう。

文芸協会の成功は更に一層明白な事実である。腹藏なくいえば文芸協会の芝居がそれほど立派なものだとは思わぬ。少くも見物してそれほど面白いとも思わぬ。沙翁劇にしろイブセンにしろ、本を読んだ時に与えられた以上の印象を受けたという事は出来ぬ。私は坪内君が諛辞ゆじを好む人でない事を知つてから少しも憚はばからず

に直言する。シカシ世間に与えた感動は非常なもので、大多数は  
尽くヒプロタイズされてしまつて、紅隈の団十郎が大眼玉を剥むい  
たのでなければ承知出来ぬ連中までが「チンプンカンで面白くね  
エ、馬鹿にしてやがる」といいながらも一種の暗示を与えられて  
これを迎えずにはいられなくなつてしまつた。坪内君の威力はエ  
ライものだ。これが時勢であらうけれども、この時代の汐先きを  
早くも看取して、西へ東へと文壇を指導して徐おもむろに彼岸に達せし  
める坪内君の力量、この力量に伴う努力、この努力が産み出す功  
労の大なるは誰が何といつても認めなければならぬ。

近来はアイコノクラストが到る処ばつこに跋扈しておるから、先輩た  
る坪内君に対して公然明言するものはあるまいが、内々では坪内

君の文学は自分等とは交渉しないナドトいつてるものもあるかも知れぬが、坪内君が新らしい文学の道を開いてくれなかつたなら今日の文学はこれほどまでに進歩しなかつたかも知れぬ、諸君のようなアイコノクラストが沢山生じたのは即ち飛とりも直さず坪内君の功勞である。坪内君は明治の文学の大いなるエポック・メーカーである。



# 青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「新潮」

1912（明治45）年1月初版発行

初出：「新潮」

1912（明治45）年1月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 明治の文学の開拓者

——坪内逍遙——

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 内田魯庵

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>